

今日の福音書は、イエス様が弟子たち12人を伝道に派遣する時のお話でした。ここまでのマルコによる福音書を読んできると、弟子たちが関わった相手は、孤独と悩みの中にある人々だったと思われます。そんな人々に弟子たちは派遣されました。最後に書かれているように、「十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした。」と、書かれています。

このような弟子たちの活動を、私なりに言い換えるなら、弟子たちは対象になる人々に、こう語りかけたのではないのでしょうか。『あなたはつらい生活をしているけど、決して神様はあなたを見離してはおられない。インマヌエル。主があなたと共におられるのだから、絶対に幸福になれる。』そう言って、励ますのが、彼らの仕事だったと私は思います。

さて、その派遣にあたり、イエス様が指示されたことが今日の福音書にたくさん出てきます。イエス様は十二弟子を二人ずつ組にして遣わされたのですが、いろんな注意を与えておられます。

まず気づくのは、持って行くものと、持って行かないものの、ハッキリとした区別です。持って行くものは、杖一本と履物です。別に山登りをするわけではありませんが、石ころだらけの道を歩いていると、サソリが出たり、オオカミが襲ってきたりすることが考えられます。足が傷つかないための履物は必要でしょうし、外敵から身を守ったり、長い旅で足の負担を軽減するためには、杖が必要なのです。羊飼いたちが、羊と共に野原に行く時、杖を持っているのと似たような必要性があるのでしょう。

それでは、持って行かないものは何でしょう。パン。袋。お金。が挙げられています。これは、他人の施しで生活して行きなさい、ということでしょう。アッシジのフランチェスコが托鉢の生活をしていた時に、ただひとつ、小さな鉢を持って、一食分の食事だけ施しをうけていた、ということをおぼろげに思い出します。袋というのは、施しを受けたものをため込むことにつながり、財産を持ってしまって、それを頼るようになることを禁じているのです。

ただ、ちょっと聖書の個所で誤解が生じてしまうことがあります。フランチェスコは今日の福音書ではなく、マタイの10章に出てくる「十二人を派遣する」という個所を読んで、自分たちの会則をつくったようで、そこには、杖も履物も持たないように書かれています。ですから、フランチェスコの映画を観ると、彼は裸足なんですね。ですから、履物については福音書によって違いがでてきます。

話を元に戻すと、今日の福音書でイエス様は、持って行くものと持って行かないもののリストを挙げて、その次に「下着は二枚着てはならない」という指示をされています。マタイでは、持ってはならないリストに「二枚の下着」と書かれ、ルカでは「下着も二枚は持ってはならない」と書かれていて、同じことを言っているようにも思えますが、私が以前この説教をした時、気づいたのは、「下着は二枚着てはならない」とマルコによる福音書に紹介されている言葉でした。これについての、ある解説に驚いたことがありました。

弟子たちを派遣する時、杖とか履物、あるいはパン、袋、お金などは、ただ言葉が並んでいるだけですが、わざわざ「下着は二枚着てはならない」と、括弧つきで書き残されているのは、ここに弟子たちを派遣する時の、大切な意味が隠されている、と言うのです。

これは「重ね着してはならない。」つまり「野宿の用意をせず、宿を貸してくれる人の好意に甘えなさい。そして神様の配慮に自分をゆだねなさい。」という意味だ、という解説がありました。

私は、「二枚の下着を着てはならない」という指示に、そんな、「野宿をするな」という意味があったのか、と、12年前に初めて知りました。わたしたちは、神様に頼る、ということは、他の人に頼ることとは、正反対のこのように考えてしまいます。他人の世話になるよりは、外で野宿する方が、神様の僕にふさわしい、と思ってしまうものです。そして、昔、旧約の預言者エリヤがカラスの持ってきた食べ物で養われたように、神様が養ってくださる、と考えてしまう。でもそれは、自分の力だけで生きて行こうとする、ヤセガマンではないか、と思わされたのです。

「下着は二枚着てはならない」というのは、「贅沢をするな」という意味ではなく、「下着一枚で寝られるように、人に頼りなさい、」という教えが、そこには隠されていることを知る必要があるのです。そして、その背後には、神様のお造りになったこの世とのかかわりを軽視してはいけません。そこに住む人々とのかかわりを忘れないように、という教えが隠されているんだ、ということです。

宗像に居た時、ユダヤ教の勉強会をしていました。何冊目かのテキストに、ユダヤ教のエイブラハム・ジョシュア・ヘッセルという学者が書いた「シャバット」という本を読んだことがありますが、これを読むと、いろいろ示唆に富んだ話が出てきました。

シャバットは、「安息日」ユダヤ人にとっては、金曜日の日没から土曜日の日没までの一日のことです。金曜日の日没まで、人々は奴隷のように働かされますが、安息日には、一週間の仕事から解放されて、喜びの日を迎えることとなります。この本は、シャバットー安息日の意義や位置づけを書いたものです。このユダヤ教の考えには、私たち、日曜日を安息日としているクリスチャンにも適応できることがあるのではないか、ということで、学んでいたのです。

私たちは第1日から第6日まで、社会の奴隷のように、この世と言いましょか、空間に支配されて働いています。しかし、第7日目はそれらの空間、この世の支配から解放されて、自由になって神様を賛美するのです。ところがそうになると、ユダヤ教の指導者であるラビたちの間では、極端にこの世のことに振り回されてはいけない、という考えの者も出てくるのです。そして、逆にこの世のことに熱心になるラビも現れて、面白いとえ話ができあがりました。イエス様が十字架にかかってから、100年ぐらい後の時代のこととして、語られているお話です。世の中はローマ帝国の支配下にありました。

3人のラビと、もう一人の人物が集まって、議論が始まりました。

まず、最初のラビは、こう言いました。「この国の人々（ローマ帝国の民）の成し遂げた業のみごときはどうか。彼らは道路と市場を造った。橋を架け、大浴場を建てた。」

二番目のラビは黙って何も語りません。

三番目のラビが答えました。

「彼らの成果のすべては彼らが自分たちのために造ったものだ。なるほど、彼らは道路と市場を造ったが、それは遊女をそこに住まわせるためだった。橋をいくつも架けたが、通行税を徴収するためだった。大浴場を建てたが、自分たちの体を楽しませるためだった。」

ラビではない四番目の男は、この話を家に帰って、語られたことすべてを両親に伝えました。ところがその話は噂になって広まり、政府の耳にまで入りました。そして政府は次のような布告をしました。

「われわれをほめたたえた最初のラビは高い地位を授けられる。黙って何も語らなかったラビは国外追放だ。われわれの成果をそしったラビは死刑に処せられる。」

死刑にされたらたまりませんから、そのラビは息子のラビと一緒に逃げて、最終的には洞穴で、12年間生活しました。そうすると、洞穴の中にイナゴマメの木が生えたり、井戸が湧いたりして、食べ物に不自由することはありませんでした。ただ、服はほころびができるので、祈る時だけ着るようにして、生活していたのです。そしてほとんどの時間をトーラーという聖書の初めの五つの書物を勉強していました。その後皇帝が死んだので、政府の布告が無効になり、ラビの親子は自由になりました。

ところが、12年ぶりに洞穴から出たラビは、世間の人々が畑を耕し、種まきをしているのを見ると、「この民は永遠の生命を捨てて、移ろいゆく生活に夢中だ。」と言いました。そして、この二人の目に止まるものはすべて、その眼光の火にたちまち焼き尽くされてしまいました。

すると突如天からの声が響き渡りました。神様の声です。

「あなたがたはわたしの世界を滅ぼすために姿を現したのか。なら洞穴にもどれ。」

そこで、彼らはさらに12か月洞穴で過ごしました。そして、神様から再び声がして「洞穴から出よ。」とのことでした。

そうするとラビたちには力が与えられて、息子の方のラビがケガをしたら、父親のラビはそれを癒せたのです。それで父は言いました。「わが子よ、われわれふたりが生き残ってトーラーの勉強を続ける限り、世界は滅びから免れる。」

彼らが洞穴から出ると、ひとりの老人が香しい二束の銀梅花（ミルトス）の花を持っていました。

「何のためにその花を持っているのか。」と問うと「今夜から始まる安息日に献げるための花です。」

父は息子に言いました。「ごらん、愛する神の戒めがイスラエルにとっていかにかけがえないものか、わかるだろう。」

その瞬間、初めて二人は魂の平安を見出した、というのです。

このラビは、ローマ帝国がもたらした文明が、ただ彼らの楽しみのためだけのものである、と気づいてそれを拒否したのですが、永遠の生命へのあこがれを持つ彼らは、結局は神様の造られたこの世を否定することになり、神様から反省を促されたのです。彼らはそれまで魂は平安ではなかったのでしょうか。

そして、この世にいながら、永遠の神様を賛美することの素晴らしさ、安息日の大切さを、老人が持つ香しい銀梅花（ミルトス）によって気づかされたということです。

ユダヤ教のラビが、この世のものを軽視して、世の中に背を向けること。そして勉強だけに専念することが素晴らしい生き方であると考えていたことを、12年と12か月。つまり13年かかって反省したことと、「下着は二枚着てはならない」と教えたイエス様の言葉に私は共通の大切なことを学ばされているように思いました。

十二弟子を派遣した時の言葉は、修道者の清貧ということを勧める、大変厳しいものだと思われがちですが、それだけで極端に走ってはいけません。神様の造られたこの世と人々を愛し、またこの世の人々の生活の中に、神様への賛美の大切さを示すことが大事なのです。

ユダヤ教のラビは、安息日に献げる香しい銀梅花でそれを悟り、イエス様は宣教する相手に宿などの世話をしてもらうことで、平安を感じたのでした。

それで蛇足のような話ですが、もう一つ、きびしい修行をしていた末に悟れなかった釈迦が、スジャータという女性が差し出した乳がゆを飲んで、悟りを開いた、という話もあります。

私たちはこの世を軽視するのではなく、神様の造り与えてくださった人々や多くのものを、喜んで感謝し、この世にあって、神様を賛美する生活をしたいものだと思われたことでした。